

【聞き書き】の意味

今回、滋賀県甲賀市土山町山内地区との交流事業を終え多くのことを学ばせていただき、お礼の意味も込め一筆書かせていただきます。

この交流事業は、自治総合センターの移住・交流促進事業助成によるものです。系満市米須地区(以下米須と記す)と山内で行った“村まるごと生活博物館”事業の取り組みは、地域の人々自身の「あるものさがしとその磨きだし」による地域の魅力の発見と地域の再生にあります。偶然にも、米須と山内の取り組みは同じ方向を歩んでいます。ないものねだりではなくあるものの意味を理解しようと、山内では名人発掘と子供達によるお年寄りからの「聞き書き」をおこなっていました。今回の山内では、米須の子供たちを交えて、5つのグループに分かれて、村の古老からの聞き書きをしました。聞き書きの内容は以下の項目です。

若いころ、どのようなお仕事をされていたか 昔はどのような動物がいたか 楽しいことは何だったか 将来の村(山内)はどうなってほしいか。子供たちの質問は、大きな項目から入り、細かな項目に派生していきます。

昔の暮らしの実態の理解と時代の変化の理由を知ることは、さらに今の暮らしの問題点を理解したうえで将来はこうありたいとのビジョンの形成です。

農水省の関係機関では、10年以上前から「全国聞き書き甲子園」を開催して、高校生による全国の川や山の名人からの聞き書き活動を支援しています。聞き書きは、市町村史や字史などの編集などにも広く用いられる手法ですが、今の時代になった“聞き書き”による記録活動はより重要な意味を持っているものと思います。

戦争が終わっても、日本の社会は価値観や暮らしの形態が大きく変化してしまいました。その変化の狭間を生きてきた戦前・戦中・終戦直後の世代の体験は現在の若い世代には想像しがたいものです。それは、一言では言い難いものをあえて言うなら、「自然との共生」と「混乱の中で生きる力」にあるものと考えます。～中略～

平和な社会を歩んでいくには、あのむごい戦争体験の記録とともに、沖縄の人々がどのように生きてきたのかを後世に伝えることは大切なことであると考えます。

その手段としての「聞き書き」は、何も子供だけの活動手段ではありません。琵琶湖博物館では、国内だけでなく国外の研究者にも名の知れた日本が誇る博物館ですが、展示の軸は“聞き書き”であると理解しています。

今回の山内プログラムには田んぼの生き物観察がありました。その前に聞き取りした杉本さんのお話では、戦前の田んぼには、カエル、フナ、ドジョウ、タニシ、サワガニ、ヤゴ、ミズスマシ、ゲンゴロウなどたくさんの生き物が住んでいたけど、戦後、農薬や除草剤を使用したころからこれらの生き物は、田んぼから姿を消したと言われました。今、全国各地の農村では地域活性化の手段としてのグリーンツーリズムやエコツーリズムの取り組みが盛んですが、これらのツーリズムは単に農村に客を迎えるということではないはずで、グリーンやエコが表そうとするのは、「豊かな生命」との触れ合いにありそうです。戦後の日本の農村から多くの生命が消えていき、人々も村を去り蓄積された祭や暮らしの姿は見えにくくなりつつあります。その失われたものを今日的に暮らしやすい村を築きあげようとするのがこれらのツーリズムの思想であると思います。

3日目に地域の有志者が準備してくださった“どろんこサッカー”は農薬や除草剤を使用しない田んぼで子供たちが水着でサッカーをしました。土と肌のふれあいによって生命の循環の理解に基づく農村づくりのひとつでしょう。また、Nさん宅では、囲炉裏と行燈の薄明かりの周りで「食べることは生命をいただくこと。食べ物を粗末にしてはならないこと」を分かりやすく教えていただきました。静寂の時間が流れる中、昔懐かしい柱時計が「ボン」となった時の子供たちお驚きの反応には笑ってしまいました。

農村を訪れる人々に農村の自然の豊かさを味わってもらうにも、消えた自然は一朝一夕には戻ってきません。最初に取り組むべきことは、過去の農村がどうであったかを知ることが重要でそれはまさに「聞き書き」から得られるのです。聞き書きは、私達現代人が置き去りにしてきた「先人が築き上げてきた共生の知恵」を再発見する大切な取り組みであることを認識しました。

最後に、今回の温かく受け入れ準備いただいた山内地域のまごころと美味しいお食事に感謝をいたします。山内地区のますますの発展をお祈りします。